

高良とみの家庭科学研究所とその教育についての 卒業生に対する聞き取り - 1

The Interview on The Tokyo Domestic Science Research
Institute (1933 - 1935) coordinated by KOURA Tomi and
Its Education to Its Graduates - 1

倉元綾子

KURAMOTO Ayako

(Received October 1st, 1998)

This is the first interview on the Tokyo Domestic Science Research Institute (1933 - 1935) and its education to its graduates.

On June 2nd, 1997, Professor SUZUKI Toshiko and I have done the interview to the graduates from the Institute, which was coordinated by Dr. KOURA Tomi.

KOURA Tomi was one of the most famous women in the movement for peace and women in Japan. Before World War II, she had dedicated herself to women's education through this institute and others. In this institute, she had tried to educate the young women with practices and experiences of their own.

The Institute built in 1933, and it was closed in 1935. The number of graduates was approximately 20, and they are all over 70 years old now. But they have clear memories of their young school days in the institute, and their teachers.

This is one of the most important record on home economics education and it gives important hints for home economics today.

In part 1, I described the circumstances of the interview, the establishment of the Institute, the motive behind entering the Institute, its teachers and the education.

Key Words:

家政学史 history of home economics, 家政学教育 home economics education, インタビュー interview

解 説

本稿は、戦前から戦後にかけて平和運動や女性運動に関わった高良とみが校長であった家庭科学研究所¹⁾とその卒業生たちに対して、1997年6月におこなった聞き取り調査の主要部分の記録で

¹⁾1934年9月設立された大日本聯合婦人会と大日本聯合女子青年団の共同施設「家庭科学研究所」とは別のものである。この家庭科学研究所については、常見育男『家政学成立史』(p.233, pp.238-241, 光生館, 東京 [1971])に記述がある。

ある。なお、本稿では、今後刊行が予定されている高良とみ著作集およびすでに出版されている『非戦（アヒンサー）を生きる 高良とみ自伝』（高良とみ，ドメス出版，東京 [1983]）と重複すると思われる部分については割愛した。

高良とみは、1896年（明治29）和田義睦・邦子夫妻の長女として富山県に生まれ、1993年（平成5）に死去した。戦前・戦後を通じて、婦人運動、平和運動に尽力した。1917年（大正6）日本女子大学校英文科卒業後渡米、コロンビア大学大学院で心理学を学び、バーナード女子大学を経て、ジョーンズ・ホプキンス大学大学院において「活動性との関係における飢えの実験的研究」でドクター・オブ・フィロソフィー（Ph.D）の学位を取得した。1922年（大正11）に帰国後、1923年（大正12）九州帝国大学医学部精神科教室研究員、1927年（昭和2）から1942年（昭和17）まで日本女子大学校教授として心理学を教えた。1940年（昭和15）大政翼賛会臨時中央協力会議員となった。戦後は、1947年（昭和22）第1回参議院全国区に民主党から立候補し当選、以後2期12年にわたって議員をつとめた。この間、1921年（大正10）婦人国際平和自由連盟大会に日本の婦人代表として出席、1931年（昭和6）日支問題の平和的解決のため中国・インドに魯迅・ガンジー・タゴールを訪問、1949年（昭和24）インドでの世界平和者大会出席、1952年（昭和27）モスクワ経済会議出席、帰路中国で第一次日中民間貿易協定調印、1953年（昭和28）日本婦人団体連合会副会長などの活躍をした。多くの国際会議に出席し、軍縮と世界平和を訴えた。一方、1916年（大正5）軽井沢の日本女子大学校寮（三泉寮）でタゴールの講話を聞いて、感銘を受け、以後、タゴール来日の際の通訳、タゴールの詩の翻訳を行なった。

この高良とみが所長になって、1933年（昭和8年）帝国女子医学薬学専門学校（のち東邦大学）²¹の付属施設として家庭科学研究所が設置された。研究所について、高良とみは自伝のなかで次のように書いている。

「この研究所は、従来の家庭における仕事を科学的に研究する目的で、女学校を卒業した女子を対象とする教育機関でした。修業年数は2年間でしたが、私はそこで女子に必要な衣食住全ての生活科学を学べるように、プログラムを組みました。そして、栄養科、児童科、芸術科、経済科の四つのコースから生徒が自分にあった科を選べるようにしました。栄養科では、栄養学の講義の他、実際に食物の買入れから調理に至るまで、生徒自身にやらせて研究するのが特色でした。児童科では、併設した保育園で、子供たちの食事、遊戯、昼寝などのいっさいの世話をしながら研究し、芸術科では、和洋服の裁縫や工芸美術、園芸を実地にやらせました。経済科では、社会経済機構に呼応して、家庭が覚醒しなくてはならないという主旨から、経済の研究を行ない、併せて職業指導もしました。以上の学科の他に共通学科があり、女学校卒業以上の婦人が、確乎たる人生観や婦人観をもち、自分の生活目的を立派に確立できるように私は考えました。

²¹1925額田豊、晉兄弟により創設。額田豊は1878-1972（明治11-昭和47）内科医。岡山県生れ。1925初代理事長。1915『安価生活法』。額田晉は1886-1964（明治19-昭和39）内科医。岡山県生れ。1925初代校長。

欧米式のもっとも進んだ知識が実地に学べるように、私は生徒たちを連れて外人宣教師の家を訪問したり、目黒の北里研究所や大森の遺伝研究所に見学に行ったり、セツルメントを訪問したこともあります。フランス料理をつくらせたり、モザイクや織物も教えられるよう、一流の講師陣もそろえました。この研究所は女子大の家政科よりも、より実際に生活科学を学べるよう意図した学校でした。私は、ここで科学的な家庭科学教育を試みたのです。おかげで、私は女子大の井上秀子先生ににらまれることになりましたが、この研究所は2年ほどで廃止され、帝国女子高等学園と改称されました。」³⁾

『東邦大学三十年史』も、高良とみの1934年（昭和9）の全国高等女学校長招待会におけるあいさつを引用して、この家庭科学研究所について述べている。その内容は、自伝とはほぼ同様である。自伝にはない記述は次の部分である。⁴⁾

栄養科では「食事ハ先生ト生徒トガ一緒ニ作ツタモノヲ食ベテ居リマス。」また、児童科は「本ヤ理論バカリデナク、別ニ作ラレテイル保育園ト絶エズ連絡ヲ保ツテ、実際ニ児童ヲ育テルコトヲ本旨トシテイマス。保育部二十数人ノ子供ヲ入レテイテ、此ノ子供達ノ食事・遊戯・昼寝ナド一切ノ世話ヲシテ、發育ニ従ツテ種々ノ観察研究ヲシテ居リマス。」芸術科では「生活ノ美化、即チ衣食住ヲ芸術的ニ美化シテ行ク目的ノタメニ」行なっている。さらにその教育について「組織的ニ合理的ニ教育スルコト」を主眼とした。加えて、「此等ノ生徒ニ科学的教育ヲ与エルタメ、姉妹校ノ帝国女子医学薬学専門学校及ビ同付属病院ノ設備ヲ十分ニ活用」することができる。

このように、家庭科学研究所は、当時の女子高等教育機関としてはきわめてユニークなもので、「科学的花嫁をつくる」ことを標榜して生徒を募集した。しかし、これは少人数教育ゆえの経営上の困難からか、わずか2年で閉校になる。高良とみは校長を辞し、名前も帝国女子高等学園と改めた。したがって、この学校の存在そのものもあまり知られてこなかったし、高良とみとその校長をしていたことも知られていなかった。

しかし、家庭科学研究所の教員たちとそのユニークな教育は、卒業生たちに鮮やかな印象を与え、深い影響を残した。高良とみと家庭科学研究所は卒業生たちにとってかけがえのないものとなっている。また、卒業後も家庭科学研究所の卒業生たちと高良とみをはじめとする教員との親交は長く続き、高良とみの遺族である高良真木氏⁵⁾、高良留美子氏⁶⁾にも受け継がれている。

家庭科学研究所で2年間をすごした卒業生たちの学校時代の思い出は今も鮮明である。この記録

³⁾高良とみ：非戦（アヒンサー）を生きる 高良とみ自伝，pp.77-78，ドメス出版，東京（1983）。

⁴⁾近藤秀雄編，加藤恭亮著：東邦大学三十年史，pp.125-126，東邦大学，東京（1955）。

⁵⁾1930-（昭和5-）洋画家。東京生れ。1953コペンハーゲンの世界婦人大会出席。フランス滞在，画業に専念。1955帰国。装丁・さし絵『タゴール詩集』『高良武の生涯』『金の環の少年』など。（新訂現代日本人名録98(2)，p.658，日外アソシエーツ，東京 [1998] による。）

⁶⁾1932-（昭和7-）詩人，評論家，小説家。東京生れ。1963H氏賞「場所」，1988現代詩人賞「仮面の声」。夫竹内泰宏とともに文学運動誌『希望』。『詩組織』同人。アジア・アフリカの詩人たちの作品を翻訳。『高良留美子の世界』（全6巻）など。（新訂現代日本人名録98(2)，p.658，日外アソシエーツ，東京 [1998] による。）

は、家庭科学研究所の詳細な教育内容について明らかにする最初のものである。

なお、この聞き取りのきっかけは、高良真木氏と鈴木敏子氏が1995年の北京世界女性会議で出会ったことにある。日時の設定と場所の提供には、高良真木氏と森安綾子氏に特にお骨折りいただいた。出席された卒業生の方々にはご高齢にもかかわらず、遠路はるばる集っていただき、長時間にわたって貴重な話を聞かせていただいた。また、テープ起こしにあたってもさらにご協力をいただいた。鈴木敏子氏は筆者らが作成した資料『戦前家政（学）関係文献に関する年表—明治、大正、昭和前期—』（倉元綾子・佐々木和子・水島かな江・井上えり子・永藤清子・朴木佳緒留：日本家政学会誌，47(5)，pp.487-495（1996））のなかに示した高良とみの『家庭科学概論』⁷⁾の所在が不明であることを記憶にとどめておいてくださった。また、この聞き取りを最初に企画し、私を誘ってくださった。皆さまのご協力とご尽力に深く感謝いたします。

パート1では、聞き取りのいきさつ、家庭科学研究所の設置、家庭科学研究所入学の動機、家庭科学研究所の教員とその教育について記した。

出席者（敬称略，図1）

森安綾子	家庭科学研究所卒業生	高良真木	高良とみの長女，画家
立入君子	家庭科学研究所卒業生	高良留美子	高良とみの次女，詩人，評論家，小説家
林 琪子	家庭科学研究所卒業生	鈴木敏子	横浜国立大学人間教育学部教授
江里口幸子	家庭科学研究所卒業生	倉元綾子	筆者



後列左より 江里口さんの娘さん 森安さん 留美子さん 立入さん 真木さん

前列左より 林さん 江里口さん 鈴木さん

⁷⁾黒川喜太郎：新版家政学原論，p.39，光生館，東京（1962）。

1. 聞き取りにあたって

高良真木（以下、真木と表す） : こちらは、横浜国立大学で家政学を教えておられる鈴木敏子さんです。鈴木さんとは、たまたま一昨年（1995）の北京女性会議にいきまして、開幕式で歩いている時にお目にかかり、名刺をいただいたのがご縁です。それまで、家政学というものはさっぱり知らなかったが、その後いろいろと母の高良とみのことを聞きました。鈴木さんは、家政学の歴史的経過をテーマに研究をしておられて、その中での高良とみの位置づけに興味をお持ちです。私も妹（留美子）と母のインド、中国、平和運動などいろいろな仕事を調べ知っていましたが、家政学のこととはまったく知りませんでした。このことについては疎いので、初めて資料などを送ってもらい、『家庭科学概論』という本があったこともそれで知りました。そこで今日は家庭科学研究所についてうかがいたいと思います。

森安 : 高良先生は私たちが卒業してからも良くしていただいて本当にいろいろなことで良く誘っていただきました。沢山の写真があるでしょう。ずっしりと、何十年とね。

立入 : 何度もクラス会をしていましたものね。

森安 : そうですね。何度も、本当に。そうでなければバラバラになってしまうところを、先生がお誘いいただきました。

林 : 先生にずいぶんお世話になっていますよね。

森安 : スワラジの劇団のことや、いろんなことでお声をかけていただきましたね。

先生が後年お住まいになっていた真鶴でも中国人の留学生を呼んで、稲葉先生もお呼びしてパーティをしたこともありましたね。

森安 : もう、亡くなるまで、そうでしたね。病院へもうかがいました。意識がはっきりしていないときにも、ただ先生がベッドに横になって息をしていらっしやるのだけでもいいからお会いしたいと思ってうかがっていました。

立入 : 森安さんのおかげですね、こうやって続いたのも。

皆 : そうですね。

林 : 森安さんと真木さんとがよくいろいろしてくださいましたから。

森安 : 真木さんが誠実にしてくださいましたから。

真木 : そういったことで家庭科学研究所の方々が母のところに最期まで毎年お見舞いに来てくださったり、誕生日にお祝いに来てくださったりして、本当に長くお付き合いいただいて本当にお世話になりました。

今日はそこで家庭科学研究所について皆様にお話をうかがいたいということで、鈴木敏子先生においでいただきました。それからこちらは倉元さんです。

鈴木 : そのあたりのことをじっくりおうかがいしたいと思います。

倉元 : 私は、高良先生のご本のことを含めて戦前の家政学について少し調べました。その中で高良とみ先生の『家庭科学概論』の名前を知りました。比較的早くから高良とみ先生についてはお名前だけですが、女性運動などにかかわっておられることを存じあげてはいました。しかし、

先生と家庭科学との関連についてはよく分からなくて、疑問に思っていました。ところが、先に真木さんからもお話しがありましたようなことを鈴木さんにうかがいました。今回はこのような集まりをもたれるというお知らせをいただきましたので、勉強させてもらうつもりで寄せていただきました。よろしくお願いします。

森安　：『家庭科学概論』はとてもよいご本でした。残念ながら失ってしまいました。なぜ失ったのかしら。

鈴木　：簡単に「年代不詳、『家庭科学概論』20頁、パンフレット」とあるのですが、

高良留美子（以下、留美子と表す）　：母の資料は、何段階にもわたって出てきました。真鶴、高良興生院、その物置と。いろいろなものがとってあるんですけど、それ（家庭科学概論）はありませんでした。どうしてないのか。わかりません。ルーズ・リーフのようなものにカリキュラムのメモはありましたけれどね。

ところで、みなさん、私より10才くらい上ですか。

皆　　：いえ、もっと上でしょう。

林　　：私は大正7年生まれ（79才）。

江里口　：私は82才になりました（大正3年生まれ）。

林　　：森安さんは私と同じ学年で、大正6年ですね。立入さんが大正8年ですね（77才）。

森安　：大正6年（1917）はロシア革命があった年です。

留美子　：男性は戦争で大勢亡くなった世代ですよ。

森安　：そうですね。小学校時代の男の子の優秀なのは、今、生き残っていませんね。ほとんど戦死しています。

2. 家庭科学研究所設置

留美子　：婦人の友の座談会で、羽仁もと子さん⁸⁾とか、母とか、が出て、母が「何とか、女性が平等な資格をもてるようにしてほしいものですね」と言ったら、他の男の先生たちは「そうです、そうです」と言うのに対し、羽仁もとさんは「なぜ、そんなに男の真似ばかりするの？女は女でいいじゃないの。そのかわり、消費組合とか、商品研究所とか、卒業生の仕事でやって行けばいいではありませんか」とおっしゃっています。そういう意味では、母は資格ということを考えた人でした。アメリカ合州国で1910年代後半の平和運動や女性参政権運動など女性運動の盛んな様子を見ています。当然、英米風の女権運動の影響を受けています。羽仁もとさんは、どちらかというともそういう風ではありません。友の会など、女性の組織をつくったのです。母が学校を始めたときも、「できませんよ、資格がないのだから」ということだったのですが、作って

⁸⁾1873-1957（明治6-昭和32）大正・昭和期の女子教育者。青森県生まれ。東京府立第一高等女学校と明治女学校に学ぶ。1897日本最初の婦人記者。1903雑誌『家庭之友』（のち『婦人之友』）創刊。1921夫羽仁吉一とともに自由学園創立。

しまいました。「30人くらいなら来るでしょう」と言ってね。

それと、母の聞き書きを見ていたら、家庭科学研究所のことは、ガンジー⁹⁾のスワラジ（自己の支配・統治，独立）の考えを実践したかったからと言っていました。

森安　　：スワラジというのはインド語なのですね。

留美子　：カリキュラムのメモらしきものもあります。皆、日本女子大の成瀬記念館¹⁰⁾に預けてあります。こういうお話があるのだったら、コピーしておけばよかったですね。

3. 家庭科学研究所入学の動機

江里口　：私がどうして家庭科学研究所に入学したのか。私は目白の日本女子大の国文科に行っていました。からだを壊しました。その頃、姉はお茶の水の女子高等師範の文科の国文を出ました。ところが、まもなく医者のおさんになって家庭に入ってしまった。そこで、「女が学問をすることは必要でない」と周りが言いはじめました。療養している私は、「国文なんかもう止めちまえ」と言われて、無理矢理止めさせられてしまったのです。それで、悶々と日を過ごしていました。そういったところへ、たまたま朝日新聞にこの学校ができたことが書いてありました。最初は家庭科学研究所高等部で募集がありました。大変うれしくなりました。

林　　　：家庭科学研究所という名前で、およそ学校らしくありませんでした。

江里口　：「この学校、いい学校だね、家庭科ならいい」というので来ました。昭和9年でした。高良先生は昭和8年に帝国女子医専の教授になられました。そしてこういう学校を作らないかということになりました。生徒が入ったのは翌昭和9年と、10年です。11年には私たちはバラバラになりました。学校を発足させたのは昭和8年なんです。新聞の記事に残っていると思います。朝日新聞にでかでかと出ました。家庭欄か社会欄だったでしょうね。きっと家庭欄かしら。それで私はもう飛びついた。（資料1）

鈴木　　：それを見て、それまでにあった家庭科とは違うように思いましたか。

江里口　：そのころ1年ぐらいの年限の花嫁学校がポツポツ流行りはじめていましたね。

立入　　：家庭科学研究所には花嫁学校という印象は全然なかった。

⁹⁾Gandhi 1869-1948 インドの政治指導者，思想家。「マハートマー（偉大な魂）」．1893-1915まで南アフリカに滞在．インド人年季契約労働者の市民権獲得闘争を指導．「サティヤーグラハ（真理の把持）」という大衆的非暴力抵抗運動を組織．1915帰国．1917ビハール州インディゴ小作争議，1918グジャラート州織維労働者争議．「アヒンサー（非暴力）」の原則を貫徹し解決．1919-22第1次サティヤーグラハ闘争．30年第2次サティヤーグラハ闘争．独立後の1948年1月30日，狂信的ヒンドゥー主義者の手によって暗殺された．1909『ヒンドゥー・スワラージ（インドの自治）』．1927-1929『自叙伝—真理の実験』．（内藤雅雄：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による.）

¹⁰⁾成瀬仁蔵 1858-1919（安政5—大正8） 明治・大正期の女子教育家．日本女子大の創設者．山口県生れ．1877大阪で梅花女学校創設に参加，78教頭．1901「人間として，婦人として，国民として」女子を教育する高等普通教育機関として，日本女子大を創設．（千野陽一：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による.）

江里口 : 「科学的花嫁を育てる」と書いてあった。

立入 : それは知らなかった。

江里口 : 私にとっては、家が鶴見の総持寺¹¹⁾の近くでもあって、通うのに都合がよかったし。

林 : 「そんないい学校ができたのなら」ということでしょうね。

江里口 : 両親がわざわざ学校へ行って先生にお目にかかって、すっかり感服して、「よい学校だよ」ということで入ることになりました。

森安 : 私が家庭科学研究所に入学することしたのは、女学校に高良とみ先生が来られて、「こういう学校を作る」という講演をなさったからです。それをうかがったので、卒業のときに担任の先生にご相談してみました。「それなら、ちょっとおもしろそうだし、そこにいらしたら」とおっしゃいましたので、入学することにしました。

立入 : 私が家庭科学研究所に来た理由をお話します。山脇女学校の卒業のとき、上に専攻科があったけれども、花嫁学校になっていました。そこに行くのが嫌で、「どうしよう」と思っていました。そこに、家庭科学研究所の薄い一枚の案内の紙を見かけました。それを見ると、書いてあることが実に高邁ですばらしかった。全然花嫁学校的なことではありませんでした。私は、女学校時分から新劇が大好きでいつも築地小劇場に芝居を見に行っていました。今でも好きです。しかし、山脇の専攻科に入ったら自由が利きません。それに対して、家庭科学研究所では教わることが、英語、フランス語、いろんな実際のなことでした。工芸など、大変魅力的な科目が出ていました。「わたしはここに行く」と思いました。その時、山脇からは私一人でした。2年目に入学しました。今日ご出席の他の方は1年目に入学しておられます。

林 : 私が家庭科学研究所に入ったのは高良先生と私の兄とのご縁です。タゴール¹²⁾が日本に最初に来日したのは大正年間です(大正5年, 1916)。2度め(実際には3度め)に来日したのは昭和4年(1929)です。その時、私は女学校1年生でした。この来日でも各地で講演をなさいました。通訳は当時和田とみ子さん(高良とみ)でした。兄が茨城の水戸高校にいました。そこでタゴールの講演をしてもらうことになり、兄がその窓口として和田とみ先生をたずね、

(資料1) 東京朝日
昭和9年2月27日

所在地
大森区大森五丁目
山脇女学校内

新設

校長 高良富子
ドクトル・オブ・フィロソフィ

家庭科学研究所高等部

〇〇 募集人員 百名(家庭科あり)

〇〇 願書受付 四月一日限り 規則書送呈

〇〇 新時代に役立つ職業教育!!!

〇〇 二年間の科学的な花嫁学校!!!

〇〇 資格 高女卒・考査四月五日

〇〇 選擇學科 兒科・産科・家庭科・衛生科

〇〇 募集人員 百名(家庭科あり)

¹¹⁾横浜市鶴見区。山号は諸岳山。福井県永平寺とともに曹洞宗の大本山。

¹²⁾Rabindranath Tagore 1861-1941 インドの詩人、哲学者。1913アジアで始めてノーベル文学賞受賞。1901シャンティニケタンに寄宿学校開設。インド独立運動の精神的支柱。詩集1894『黄金の舟』, 1916『渡る白鳥』, 1933『追伸』, 1936『木の葉の皿』, 1941『絶筆』, 長編小説1910『ゴーラ』, 戯曲1910『王』など。

日にちのこと、時間のことを打ち合わせて、水戸の人間と和田先生とのつなぎの使い走りをしました。私より16才上の兄でした。あの頃、先生は32、3才、兄は27、8才だったと思います。兄が知り合った頃、先生は結婚なさって高良とみに変わられました。水戸の女学校を4年で出て、女学校の同窓会がたてた裁縫を主体とする専攻科で一年裁縫をしました。「このまま田舎でどこかへお嫁に行かされるのは嫌だな」と思っていました。そこで、「目白（日本女子大学校）の家政科なら行ってみてもいい」ということで願書を出しました。そうしたら、その願書をみた高良とみ先生が兄のことを覚えていて、「今度こういう学校を作るから」といって、入学案内を送ってくださったのです。実に立派な先生のお名前がそろっていました。兄も母も私も、「こんなすばらしい学校ができるのなら、是非そっちがいい」ということになって入学しました。

鈴木　：目白の日本女子大学校よりももっと家庭科学研究所の方が魅力的でしたか。

林　　：魅力的でしたよ、それはもう。

立入　：あの紙、私も今は手許にないけれど、あれを見て、「ウン、ここだ！」と決めたのですから。

江里口　：当時（昭和9年 [1934]）の2月、3月くらいの朝日新聞をご覧になると、私どもが感激した趣意書があるんじゃないでしょうか。

林　　：高良先生は明治29年（1896）生まれですよ。主人の林のおばさんたち4人は明治16年（1883）から24年（1891）までの生まれです。九州の女学校もない、汽車も通っていないところから、目白の女子大の女学校に入れています。別府まで来て、別府から船で神戸に着いて、それから汽車をのりついで、一晩か二晩かかって、小学校六年を出たばかりの娘を婆やを連れて、東京へ出しています。博多へ行けば女学校はあるのに、そのお祖父さんという方は思いきって、良妻賢母の女性の最高学府は目白の女子大だと決めて、そうされたようです。一番上のおばさんは桜楓会の理事かなんかをずっとやっていたらしいです。戦後2年くらいで亡くなりました。その方は文学部でした。恋愛結婚をされました。二番目のおばさんは日本女子大の女学校の舎監をしておられました。かなり晩婚でした。この方は英語の先生と結婚されました。この二人は国文科と英文科でした。そこで、お祖父さんは、「東京に出すと女の子は生意気になってしまって、自由結婚したり、親の言うことを聞かなくなるから、家政科なら良い」ということで、あとの二人は家政科に入れられました。三番目のおばさんは日蓮宗のお坊さんの家の方と知り合って、猛烈な反対がありましたが、熱烈な結婚をしてみました。そして、そこから毎日2里も先の女学校の家政科の先生として勤務されました。その後、50才と少しで亡くなりました。

森安　：私が府立第一高女¹³⁾のときの校長は市川源三さん¹⁴⁾で、非常に新しい考え方を持ってお

¹³⁾1888（明治21）京橋区小田原町に東京府高等女学校として校長大東重善で開校。1896（明治29）神田区錦町に移転。1900（明治33）東京府第一高等女学校と改称。1901（明治34）東京府立第一高等女学校と改称。1902（明治35）浅草区七軒町に移転。（長谷川喜代蔵：明治大正昭和と教育思想学説人物史第2巻明治後期編，p.515，湘南堂書店，東京[1943].）

¹⁴⁾1874–1940（明治3–昭和15）明治・大正・昭和期の女子教育家。長野県生れ。1901東京府立第一高女，以後教諭，教頭，校長，34年在職。教育学，心理学の研究者。1935同校同窓会創設の鷗友学園高等女学校（櫻陰高等女学校）校長。女子教育の普及，向上のため全国高等女学校長協会，全国中等学校女教員会，女子教育振興会などを創設。『現代女性読本』，『婦人問題講話資料』など。（館かおる：日本人名大事典現代，p.67，平凡社，東京 [1979] による。）

られました。男も女も同等だという教育を受けました。女学校の英語のテキストの程度が低いというので、中学校の本を使っていました。

卒業のときに関西に旅行しました。「卒業後、このまま結婚して家庭に入ったらなかなか女性は外国へ行くことなどもできないから、外国船に乗せてあげる」と言われました。横浜から神戸まで「大洋丸」というアメリカ合州国からオレンジを沢山積んできたきれいな船に乗って行きました。全員一等船客で行きました。音楽をやったり、鏡を見て、きちんとしてから食事に行きなさい、など、船の中のマナーを教えてくださいました。船長さんや事務長さんと一緒に外国人などと一等船客として一緒にご飯を食べたりしました。いろいろなエチケットなどを教わりました。私は「この船に乗ったまま香港までも行きたいなあ」と思いました。「降りたくないなあ」と思いました。横浜港を出るときにはみんなできれいなテープをパーッと投げて、まるで外国に行くような気がしました。どこに行っても困らないようにと教えてくださいました。

鈴木 : そうすると、日本で当時でも東京などではずいぶん進んだクラスはあったのですね。

留美子 : 母は神戸第一高等女学校で木綿の筒袖を着て、ずいぶん厳しい女学校時代をすごしたようです。それが東京で女子大に来たら、付属出身の方はハイカラさんが結構多くてびっくりしたそうです。都会と田舎とでだいぶ違いがあったのでしょうか。

鈴木 : そうということが戦争の中でつぶされていった側面はあるのでしょうか。

森安 : そうはいつでも、私どもは市川先生の非常にいい教育を受けたので、「第一魂」というのがあるのですね。「自分を殺してでも人のために何かをする」というような場合にもあれこれ言わずに、「第一魂だから」と言って、見守っていくようなところがありました。市川先生は、入学式の時御製(ぎよせい)を一字間違えたことがあって、東京都からにらまれていました。「あれはあまり先端を行き過ぎるから」とクビにしまいました。その時、学生が皆非常に悲しんで、皆でお金を集めて今の鷗友学園を作ったのです。府立第一は本浅草御徒町(以前竹町)から少しいったところにありました。

留美子 : 私の夫¹⁵⁾の母親が明治29年生まれで、府立第一高女を出ています。ごく早い時期の卒業生です。

森安 : ミセス羽仁は1回生です。

江里口 : 私の母も第一高女の第4回生です。後で斎藤実の奥さんになられた方が、その時代にすでにこんな高いハイ・ヒールをはいていらしゃったそうです。

留美子 : 日本で一番最初にできた高等女学校でしょうね¹⁶⁾。

江里口 : あの時は築地にあったそうです。母は麻布十番に住んでいました。そこから歩いて通ったということでした。

¹⁵⁾ 竹内泰宏。1930-1997(昭5-平9)東京生れ。作家・文芸評論家。

¹⁶⁾ 日本でもっとも早い公立の高等女学校は1872(明治5)の京都府によるものである。のち1879(明治12)栃木、岐阜。(長谷川喜代蔵: 明治大正昭和 교육思想學說人物史第1卷明治前期編, pp. 349-350, 湘南堂書店, 東京 [1942].)

森安 : 三木武夫さん¹⁷⁾ の奥さんの睦子さん¹⁸⁾ は、先日アメリカ合州国に行って陶芸を教えてきたそうですが、あの方は私の同級生です。三木さんは国連の婦人の会の会長をしておられて、私たちも入金しましたよ。

倉元 : どうやら、府立第一高女の卒業生の皆さんは気骨のある方が多いようですね。

江里口 : 私は植民地育ちで女学校卒業後こちらに来ました。女学校は朝鮮の公立5年制高等女学校でした。「女である前に人間であれ」という教育を受けました。それを今の人に言いますと、びっくりしますよ。

倉元 : それはちょっと考えられないことですね。

林 : 70年以上も前のことですからね。

江里口 : 昭和の初めの頃のことですね。

留美子 : やはり、それは校長先生などの中に新しい考えを持った方がいらっしゃったということですね。

鈴木 : 教育というのは大事ですね。こうしてみると、家庭科学研究所に皆さんが入学されるにはそれ以前に非常によく似た共通した背景があるようですね。それがさらに家庭科学研究所の教育信条ともぴったりと適合して、いっそう磨きがかかったように思いますね。

4. 家庭科学研究所の教員とその教育-1

鈴木 : ところで、最初に入学されたのは何人になりますか。

皆 : 最初は5人でしょ。

江里口 : 9月にまた増えたのね。

鈴木 : 4月に5人、9月に増えた。

皆 : 写真があるでしょ。

林 : 帝国女子医専は今の東邦大学です。

鈴木 : グラフのコピーによると「東京家庭科学研究所」と、東京がついていますね。哲学博士 高良富子女史の経営」と書いてあります。

留美子 : 母は週に1回くらいは学校に行っていたのでしょうか。

森安・江里口 : 毎日でしたよ。初めのうちは毎日来ておられましたよ。

江里口 : 先生ははじめのうち、緑色のワンピースを着ておられました。

¹⁷⁾1907-1988 (明治40-昭和63) 昭和期の政治家。徳島県生れ。1937総選挙に初当選。以来連続19回当選。歴代政権の重要閣僚、党首脳を歴任。1974-1976首相。(内田健三:世界大百科事典,(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha,東京[1998]による。)

¹⁸⁾1917- (大正6-) 全国発明婦人協会会長, アジア婦人友好会会長。千葉県生れ。国連婦人会会長などを歴任。日中友好や南北朝鮮統一などに尽力。『信なくば立たず』。(現代日本女性人名録, p.43, 日外アソシエーツ, 東京[1996]による。)

鈴木 : グラフのコピーにある全てが家庭科学研究所の建物ですか。

森安・立入 : はい、そうです。古い女子医専の建物をそのまま受け継いで使わせてもらいました。
ナースリー・スクールや階段教室などもあって大層広がったですよ。

鈴木 : 十数人の学生たちだけで、これを使っていたのですね。ずいぶん贅沢ですね。

真木 : 家庭科学研究所の月謝は高かったのではありませんか。そうでもありませんか。

皆 : 覚えていません。

林 : 月謝そのものは、1年間収めて120円だったと思います。寄宿舎の方が20数円でした。
寄宿舎の方はよその女子の寮より安い方でした。後に、25円くらいに値上げされたので、別のところの下宿された方が一人ありました。それこそ、お掃除から何から、当番の1週間は、二人で朝昼晩のメニューを考えて、買い物をしました。舎監の小出政子先生からお預かりしたお金をもって、蒲田の方まで行って、野菜や肉や魚やを、週のうち、2、3回に分けて買ってきて、4人前こしらえました。2学期になったら、人数がぐっと増えて、8人くらいになりました。雑巾がけ、トイレの掃除も含めて、小出先生にずいぶん見ていただきました。何か小さな貸し家でした。千本格子のガラス戸が入っていて、それまで拭きました。

立入 : 暗い家、だったら覚えています。

鈴木 : 先生はその時何人いらっしゃいましたか。どのような科目がありましたか。

森安・立入 : 先生は沢山いらっしゃいました。医専から、よい先生がいらっしゃいました。生理学の永沢滋先生、植物学の田子勝弥先生、植物学の久内先生、薬専の先生がピックアップされて来ておられました。額田年、額田敏先生も来ておられました。池内本先生もおられました。フランスに留学した理学博士でした。おもしろかった。

立入 : 染色の先生は坂本眞琴さん¹⁹⁾でした。この方は平塚らいてうさん²⁰⁾などと一緒に青踏社で女性運動をしていた人です。ご自分でも禁酒運動を組織しておられました。

江里口 : ろうけつ染めなんかね。

立入 : 私もハンドバッグかなんか作ったのを覚えています。

立入・江里口 : 洋裁がお二人、和裁はお一人でした。綿入れなどを作りました。

¹⁹⁾1899-1954 (明治32-昭和29) 大正・昭和期の婦人運動家。静岡県生れ。1913青踏社に入社。1920新婦人協会結成に参加。1923婦選獲得同盟会計理事、議会運動委員長。英文速記者。日本国民禁酒同盟に参加。消費組合家庭学校・警察官家庭婦人協会講師。(日本女性人名辞典、p.478、日本図書センター、東京 [1993] による。)

²⁰⁾1886-1971 (明治19-昭和46) 大正・昭和期の女性解放運動家。東京都生まれ。日本女子大学校卒業。1911『青鞥』発刊、以後、編集経営。創刊号に「元始、女性は太陽であった」を書く。1918与謝野晶子と母性保護論争。1920市川房枝らと新婦人協会結成。1929消費組合「我等の家」設立。1953日本婦人団体連合会初代会長。1962年新日本婦人の会代表委員。1971-73自伝『元始、女性は太陽であった』。

資料2 家庭科学研究所の教員一覧

理事	長	額田 晋	?	三田 庸子	細菌学	ワット・ショーフル
所長		高良 とみ	染	坂本 眞琴	細菌学	池内 本年
			モザイク	桜井 一忠	細菌学	額田 逸雄
音楽	楽	小出 政子	洋書	杉野 芳子	細菌学	高木 逸雄
英語	語	松本 厚	文	鷹見 芝香	料理	大下 あや子
フランス語・ドイツ語	ウイテク	ウイテク	児童文学	佐佐木 信綱	料理	一戸 伊勢子
料	理	杉本 藤	経	村岡 花子	小原流生花 花月流お煎茶	工藤 光園
?		遠	建	上野 陽一		
お菓子	心理	ボン・マルシェ	国	三田 克彦	寮 監	小出 政子
児童	心理	稲葉 信龍		獅子 野		
栄	養	宇野 武男	動物学	田子 勝弥	ナースリースクール 保育者	松浦 美保
文	芸	松本 生太	植物学	久内		伊沢 中
手	芸	村井 米子	生理解剖	永沢 滋		川
		森				

資料3 家庭科学研究所の卒業生

第1回生 4月入学	平山 (江里口)	第2回生 4月入学	大磯
	古屋 (柏原)		松本
	三浦 (大久保)		五十嵐
	犬伏		勅使河原
	奥野 (林)		松橋
			松橋
第1回生 9月入学	大路		本間
	佐藤 セイ		黒須
	大河内		佐藤 良子
	川崎		
	小谷 (?小沢)		

真木 : 林さんがリストを作ってくださいました。(資料2, 3)

皆 : 文学は村岡花子さん²¹⁾。フランス語とドイツ語はウイテクさんでした。この方は女性でオーストリア人でした。英語は高良とみ先生と松本厚さん。音楽もありましたね。

林 : 田舎の女学校で習った英語では不十分でね。よく勉強している東京の女学校の方とは一緒にやっていけないのではないかと思いました。ですから、初めてのドイツ語の方がいいかしらと考えてドイツ語の授業をとりました。すると、英語で説明をされる。英語とドイツ語を対比して教えてくださいました。そうしたら、その英語の方がわからなくて、難しかった。

森安 : 語学はフランス語と英語とドイツ語でした。私はフランス語をとっていました。三田庸子先生と一緒にフランス語をやったことがありましたね。テキストは1冊しかないのです。それを三田先生がガリ版で印刷しました。

江里口 : モザイクの桜井一忠先生も原書で教えてくださいました。

林 : そういえば、三田先生の建築の原書を丸善に行ってみんなが買いましたね。皆さんはす

²¹⁾1895-1968 (明治28-昭和43) 昭和期の児童文学者。山梨県生まれ。『赤毛のアン』などの翻訳者。

らっと読めるのに、私はなかなか読めなくてね。レベルの高い先生方がシャンと現われて教えてくださる。こっちの脳みそがついていけませんでした。

皆　　：松本厚さんからはドイツ語の文法と民話的な教科書で購読をすることもしました。

江里口　：ドイツ語などをお習いしたことを未だに覚えています。der, des, dem, den とかね。目黒のボン・マルシェの方にキャラメルやら、シュー・クリームやら、お菓子を教えてもらいましたね。

森安　　：シュー・クリームなんて、いっぱい作ってしまっただけね。みんな充分すぎるほど食べました。実地のことでしたね。

林　　　：佐佐木信綱先生²²⁾。とにかく、5人の生徒であんなえらい先生がお話くださいました。1年目だけ、3回ぐらいでした。あとは宍戸先生という方で、日本で初めての女子の大学出身者のうちの一人で東北大学の方でした。シャツシャツシャツシャツと廊下を歩いていらっした。

森安　　：高良先生のご存知の方をいろいろとお呼びになったようですね。

林　　　：佐佐木信綱先生は短歌の手ほどきをしてくださり、手紙を書くようにと言われました。

森安　　：建築は三田先生でしたね。早稲田の工学部を出た人で、三田庸子さん²³⁾の弟さんです。とっても面白かったわね。絵がお上手で、サッサッサといろんな絵を描かれました。当時、三田庸子さんは舎監みたいにしていちゃいました。

林　　　：この間、テレビで「今日は何の日？」というときに、三田庸子先生が和歌山刑務所の日本で初めての女性の所長さんで、松井子爵のお姉さん、松井子爵は落合の今の高良興生院の土地にお屋敷を持っておられました。黒川男爵は興生院の土地の前の所有者です。

森安　　：三田庸子さんは、(日本)女子大学の舎監をしておられたのを高良先生がお呼びになり、家庭科学研究所で副校長みたいにしていちゃいました。のちに三田先生のお嬢さんと田中澄江さんの坊ちゃん(身障の方)と結婚されました。三田庸子さんは刑務所の所長になりました。そこで女囚に腕を切られました。映画にもなりましたね。三田庸子さんは亡くなられましたね。

江里口　：同志社の海老名弾正²⁴⁾のお嬢さんで、大下あや子先生。お料理を教えてくださいました。乳児の肌にバターをすりこんで吸収するようだったら食べさせてもよいと言われたことを覚えています。

²²⁾1872-1963 (明治5-昭和38) 明治・大正・昭和期の歌人、国文学者。三重県生まれ。

²³⁾みたつねこ 1904-1989 (明治37-平成元) 日本初の女子刑務所長。横浜市生まれ。1929聖ヒルダ揺光ホーム孤児院副舎監。1930香蘭女学校舎監。1947和歌山刑務所長。1957和歌山県婦人寮長。1960東京婦人補導院長。1976東京聖公会八王子幼稚園園長。

²⁴⁾1856-1937 (安政3-昭和12) 明治・大正期のキリスト教の代表的思想家、教育家。筑後国柳河藩士の子。熊本バンドに加わる。1879同志社卒業。同年群馬県安中教会設立。1897-1920本郷教会牧師。1920同志社大総長(-1928)。1900-23『新人』刊行。1909-1919『新女界』刊行。(土肥昭夫：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による。)

立入 : 稲葉先生もいらっしゃる。病院の人も来ていました。病人食、栄養士が教えに来ていました。

森安 : 一戸伊勢子先生も来てくださいました。一戸先生はよく果物などをつかって、瓶詰めなど貯蔵する方法を教えてくださいました。瓶をお湯に入れて、びわの甘く煮たのや、瓶詰めしました。真木さんはよく瓶詰めなさるのでしょう。

このころに、パネル・ヒーティングというのを習いました。もう、60年以上も前ですよ。おもしろかったなあと思います。

写真のこの方は桜井一忠さんです。モザイクを教えてくださいました方です。桜井先生はイタリアから日本に初めてモザイクを紹介なさった方です。この方が家庭科学研究所に来校してモザイクを教えてくださいました。私は、あとでもう一度モザイクを本格的にやることになりました。

林 : 飄々とした、とても軽やかな感じの先生でしたね。

江里口 : 厚紙に、色紙を貼って細かく切って、それでモザイクにしました。

安森 : ガラスの切ったのを使って、銀のブローチも作りました。

留美子 : 平塚らいてうさんの夫で画家の奥村博史さんなどは関わりはありませんでしたか。

森安 : いいえ。

林 : 森安さんは、今やモザイクで超一流になっていらっしゃいます。その最初のきっかけは桜井先生ですか。

森安 : そうですね。あの時が初めてですね。

立入 : みんな、これ全部（森安さんのお宅の装飾、調度など）森安さんが作っておられるの。

森安 : 織物も教えてもらいました。織物は杉並に居られた中村古里さんという女性の方でした。織機を使って初めて織物を習いました。平織と綾織ぐらいでしたが、家庭科学研究所で教えていただきました。戦争前、もう60年近くまえのことになりますね。そのころから織物をやっていることになります。

鈴木 : 家庭科学研究所では音楽の時間もあったのですか。

皆 : ええ。寄宿舎の舎監をしておられた小出政子先生がおられました。

留美子 : 歌う方ですか、それとも聴く方だったのですか。

森安 : 小出先生がピアノを弾いて、それで歌いました。

林 : 私は児童科に入っていたから、ナースリー・スクール幼稚園の関係で器楽をやりました。児童科の他には、栄養科、家政科、芸術科、経済科がありました。

留美子 : そんな風に別れていたのですか。

立入 : 私は知らなかった。

江里口 : 私は、児童研究をやっていました。

林 : だから、村岡先生がお出でになって、児童文学を割とまめに見てくださいました。何ともまあ、できそこないみたいな私でも直して下さったりしました。ナースリー・スクールは最初からありました。学校のそばにあったでしょ。「鬼足袋」や「新高ドロップ」の会社の女工さ

んたちの子どもを預かっていました。保育園を併設したら沢山来たのです。朝、お母さんたちが子どもを負ぶって連れてきました。一番小さい子は1年8ヶ月でした。ナースリー・スクールとって、名前がユニークでしたね。「どうして看護婦養成所みたいな名前かな」と思っていました。ナースリー・スクールの評判は良かったですよ。大勢来ていました。

鈴木 : 保母さん3人に、子ども15人くらいとは、大変行き届いていますね。

江里口 : 松浦美保子さんが主任でした。福岡の女専出身の方でした。共同購入のことも研究しておられました。

林 : お昼寝もさせたし、お母さんが夕方連れにくるまで預かりました。私たち学生は授業の一環で保育所に出向いていきました。それで、どの科の人も皆行きました。

立入 : 木工では糸鋸でおもちゃを作ったことを覚えています。

林 : そうそう。手押し車など、小さいものを作りました。それを子どもたちに使わせました。

立入 : 糸鋸で、ガリガリガリと実地でやって、おもちゃを作ってね。

林 : 牛乳を含めて600カロリーのお昼のおかずをこちらで作りました。それを持ってきたお弁当と一緒に食べさせるのです。子どもの栄養がよくなるようにね。写真のこの方が松浦さんです。こちらは、建て増したナースリー・スクールです。

留美子 : 子どもを育てながら働く女の人に喜ばれたでしょうね。

林 : 女工さんたちは大変でしたよね。

留美子 : 写真を見ると、子どもたちは栄養が行き届いているようで、まあ、大きい子どもたちですね。

林 : 学校に行くまでの子どもが来ていました。年齢差が非常に大きかった。ですから、大きい子は次の年か、その次の年には学校に行くくらいの年齢の子です。幼稚園ではなく、保育園でした。

立入 : 家庭科学研究所では実際的なことを教わりました。料理でも、お昼はみんなで作りました。必ずみんなで作りました。当番を決めて、買い出しも行きましたしね。

森安 : 高良先生は、お昼は当番のようにして皆で作らせるようにされていました。買い出しにも行くんですよ。食堂で皆と一緒に食事をしました。そして、「黙って食べてはいけない。日本では今まで黙って食べていたけれど、楽しくお話ししながら食事しましょう」とおっしゃいました。

林 : 杉本先生のご指導でフランス料理をしましたね。帝国女子医専の方も開校してまだ数年しか経っていませんでした。そこで、学生募集のために全国女学校長会議が東京で開かれた時に、医専を見学したい方をもてなしました。みんなでテーブルをセットして、2, 30人分を杉本先生がメニューを考えて、私たちが料理を作ってサービスしました。

江里口 : あの時、私の母校の校長先生も来てくださったの。

林 : 最後にコーヒーをお出ししてね。目をパチクリして、教えていただく通りにしました。サービスの仕方なども教えてもらって、すぐに実地に実行しました。何でもすぐに実地に実行させてくださいました。

江里口 : 私の母校の校長先生がわざわざその翌日学校に見学に来られました。その後、私宛てに手紙で「地についての学問だから、よく勉強するように」と激励されました。

林 : 英語は松本亦太郎先生²⁵⁾ の息子の松本厚さんに教わりました。

留美子 : 松本亦太郎先生は日本女子大で心理を教えていました。女性が高等教育を受けることについて非常に新しい考えを持っていて、原口鶴子²⁶⁾、高良とみと、女子大から女性心理学者を生み出すのにとっても貢献した方です。

森安 : 稲葉先生も心理学だったでしょ。

留美子 : 動物学や植物学、細菌学までやったと言っていました。

林 : 医専の教授が私どもの小人数の教室に来てくださいました。生理解剖などは医専の地下の遺体安置所を見たりしました。田子勝弥先生は太って、まん丸なお顔で、楽しくお話されましたね。

立入 : カエルの解剖をして心臓を動かしました。

林 : 少量のアドレナリンを与えてやると、子宮の収縮が促されて、出産が容易になる、そういうことをウサギかなんかで実験して見せてくれました。死んだヤギの解剖をしました。女子医専のおおきな解剖室でやりました。

森安 : そんなこと、やりましたかね。私、逃げ回っていたかもしれません。

林 : あとでエジプトに行ったときです。ミイラをこしらえるときの道具がああ解剖の道具と同じだと思いました。解剖台の真ん中が溝になっていて、血液がどンドン流れるようになっていきます。生理解剖の若い先生で永沢滋先生、その先生が、数名だか十名だかを医専に連れて行って、解剖室でやって見せてくださいました。それで、心臓だの、腎臓だの、組織を全部取り出して見せてくださいました。そういうことまでやることができました。医専のバック・アップがあったからできたのですね。

森安 : 医専の先生方、何でもしてあげるとおっしゃってくださいました。少ない人数で、おもしろいんですよね。点数つけるわけではないしね。お友だちみたいでした。

²⁵⁾1865–1943 (慶応1–昭和18) 明治・大正・昭和期の心理学者。群馬県生まれ。東京大学教授。日本女子大学児童研究所長。日本の心理学の創設者。日本心理学会初代会長。実験心理学的基盤を作る。心理学の普及に貢献。(松本恒之: 日本人名大辞典現代, p.730, 平凡社, 東京 [1979] による.)

²⁶⁾1886–1915 (明治19–大正4) 明治・大正期の心理学者。群馬県生まれ。日本女子大学校で松本亦太郎のもとで心理学を修める。1907渡米。コロンビア大学でソーンダイクらにつき実験心理学、一般心理学を専攻。1912Ph.Dを取得。同年帰国。30才で病没。(日本女性人名辞典, p.847, 日本図書センター, 東京 [1993] による.)

- 林 : お友だちね、ケロツとした娘ばかり、医専の学生とは少し雰囲気の違いがありました。
- 立入 : 先生方も楽しそうにしておられました。
- 林 : 久内先生は小石川の植物園につれて行ってくださいました。
- 江里口 : それから、高木先生というお医者様がいらっしゃいました。
- 林 : 内科、小児科の方で、「一般概論」という家庭向きの内科や小児科の常識について教えてもらいました。高木逸雄先生は三笠宮が澄宮とおっしゃった頃の侍医でした。妃殿下も高木さまでしょう。高木先生のお兄さんか、弟さんかです。本当にご立派な先生方が大勢いらっしゃいました。
- 江里口 : 高木先生は、慈恵医大の高木兼寛さん²⁷⁾の息子さんか、親戚かしらの方で、とても立派なお公家様みたいな方でした。
- 留美子 : それは父(高良武久²⁸⁾)の紹介かもしれませんね。父は慈恵医大だから。
ところで、一時はドレメなどの洋裁学校が大流行でした。戦後、洋裁の本などもたくさんありました。今では、1000円もあれば、簡単なものは手に入るし、自分で布を買って作る方がかえって高くつきます。
- 江里口 : 家庭科学研究所でも習いましたね。
- 林 : ドレス・メーカーの杉野芳子先生²⁹⁾が1回だけお見えになりました。あとの先生が毎週見えてずっと続いていました
- 江里口 : ショーフル先生っていらしたでしょ。
- 林 : オットー・ショーフル先生は有名な先生で、日本語をよくお話しなさいました。
- 江里口 : 戦後亡くなったときに新聞にお名前が出ていました。あの方は、一番衛生的だと、夏にも鍋焼きうどんしか食べませんでした。
- 林 : オットー・ショーフル先生は細菌学の先生でしたからね。細菌学の授業でドイツ語が出ます。それを通訳してくださるのが、額田先生のご子息で、年先生でした。オットー・ショーフル先生はかなり日本語に通じておられました。9月頃でしたか、教室をあけて、いきなり、「言

²⁷⁾1849-1920(嘉永2-大正9)明治・大正期の軍医。宮崎県生れ。1872海軍省出仕。75-80ロンドン留学。80東京海軍病院長。81成医会講習所(のち東京慈恵会医大)所長。翌82有志共立東京病院(のち同大学付属病院)設立。85同院に看護婦養成所設立、日本最初のナイチンゲール式近代看護教育開始。85海軍軍医総監。脚気減少に努力。開化期の先端的文化人として活躍した(鹿鳴館のバザー、神前結婚、オーナードライバー、洋装のすすめ)。(長門谷洋治:世界大百科事典,(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京[1998]による。)

²⁸⁾高良武久 1899-1996(明治32-平成8)精神医学、神経症学。鹿児島県生れ。九州大講師、根岸病院医局長、慈恵会医科大学講師、1937(昭和12)教授。1939(昭和14)高良興生院開設、1964(昭和39)退職。この間、精神神経医学会会長、東京都精神衛生協会会長。(現代物故者事典1994-1996, p.222, 日外アソシエーツ, 東京[1997]による。)

²⁹⁾1892-1978(明治25-昭和53)昭和期のデザイナー、洋裁学校経営者。千葉県生れ。1914-1920渡米し洋裁研究。1926ドレスメーカー女学院創設。洋裁を通して日本女性の生活・意識を改革。(コンサイス日本人辞典<改訂版>, p.667, 三省堂, 東京[1990]による。)

うまいと思えど今日の暑さかな」とおっしゃって、「今日は暑いですね」と入ってこられました。それで、皆ゲラゲラ笑って喜んでしまいました。ともかく、先生方が小人数で教育をしてくださいました。服装も自由でした。医専の生徒さんたちは制服をキチッと着ておられましたが、家庭科学研究所ではそういうことはなくて、息抜きをしておられました。

森安 : 先生方が皆、かわいがってくださいました。留学してドイツに行っていたときの話しとか、パリでの話しとかしてくださいました。

森安 : 工藤光園さん³⁰⁾ がいらっしゃって、お花をやったでしょう。

江里口 : 小原流の一等上の人。

立入 : お習字が鷹見芝香先生³¹⁾。

森安 : それは女子高等学園に変わってからでしょう。

林 : 私は幼稚園を辞めてから、工藤光園先生にお花と花月庵のお茶を習いに行きました。秋の結婚式までに大急ぎでお免状を格好だけもらいました。そのお免状と入学案内とそういったものをひとまとめにしておいたのが、いまだに見つからないんです。

森安 : 工藤光園さん、小原流の宗家みたいな。その息子さんが後を継いでおられましたが、今もずっとありますね。神保町の如水会館でお華の個展をなさいました。すばらしかったです。苦労に苦労を重ねておられるのですが、それをおくびにも出さずにスツとしておられました。

立入 : 鷹見芝香さん、本名は乙女です。松橋さんはずっと習っておられました。

江里口 : 有名な江戸時代からの由緒ある家系らしいです(鷹見泉石³²⁾)。

森安 : 鷹見先生のご主人が婦人画報の何か、一等上の人、編集長か、をしていらしたでしょう。

林 : グラビア写真のこの方はベネセスさんです。女子医専に入るつもりでした。その前に、語学を学ぶために家庭科学研究所に入られました。フィリピンの貴族のお嬢さんです。

江里口 : ナースリー・スクールでは皆、上っ張りを自分で作っていました。

林 : グラビアの写真に写っているのは私です。幼稚園の子どもの上っ張りも、2, 3着、ミシンで縫いました。何でも自力で作らせるというのが先生の主義でした。子どもを15人預かっていました。その人たちに着せる上っ張りなども実習で縫わせてもらいました。

鈴木 : 2年間でよくそれだけできましたね。1日の時間数はどれくらいだったのですか。

³⁰⁾1892-1971 (明治25-昭和46) 花道家。福島県生れ。1916から小原流平一鶯に師事。後二代家元小原光雲に師事。1929小原流工藤光州主宰の研美会継承。1936女流として最初の個展を一ツ橋如水会館で開催。東京花道界の重鎮。(重森弘淹: 日本人名大事典現代, p.278, 平凡社, 東京 [1979] による。) 工藤光園は額田理事長の娘さんのお花の先生という関係があった。

³¹⁾鷹見芝香は宇野武男が連れてきたという。

³²⁾1849-1920 (天明5-安政5) 江戸後期の下総古河(こが)藩家老、蘭学者、幕政家。天保年間(1830-44)に大坂城代、老中を務めた藩主土井利位(としつら)を補佐し活躍。蘭学、ロシア語、天文・地理学を学ぶ。海外地図収集。渡辺崋山の描いた肖像画『鷹見泉石画像』が知られる。(大口勇次郎: 世界大百科事典, (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による。)

林 :ともかく、実習でした。午前中はだいたい授業がありました。午後からは実習でした。順番にお話しをしましたね。何か、学校へ出て行くのが楽しみでしたね。医専の構内、その側の小さな二階家が最初の寄宿舍になりました。こちらは遊び心で来ているので、医専の学生がベンチに腰掛けて一所懸命勉強して覚えているのを、「タケノコさん、忙しいね」って言って笑っていました。

林 :超一流の先生が本当に揃っていましたよね。

森安 :すばらしかったですよね。